

## セクショナリズムと諸教会

——アメリカのディノミネーションナリズム——

大 下 尚 一

アメリカのキリスト教の歴史を問うならば、政教分離の実現と、多数の教派が成立して共存してきたこととがその特徴として指摘される。それはキリスト教史の特性である以上にアメリカ・デモクラシーがみごとに達成した一側面として讀えられてもきた。これはすでに古典的認識に属するが、今なお、マンスをかえながらいきている。

広汎な実証的研究にうらづけられながら、いつもアメリカ史の特性の探究という課題にこたえてきたのは、現在アメリカ教会史家たちのディーンといわれるスウェート William Warren Sweet であつた。<sup>(3)</sup> そして今日のアメリカ教会史の成果は何らかの点でスウェートのかかる立場の影響をうけているといえよう。一方、アイディアが強く要求されるアメリカ史家にとっては、とくにインテレクチャル・ヒストリの分野において、キリスト教の歴史はアイディアの大なる倉庫である。また、所謂「アメリカ文明」の研究においても、キリスト教の歴史は、思想と社会の面でアメリカ的価値を見いだすよい作業場となつてゐる。<sup>(4)</sup> 然しわれわれは、このような傾向を示す多くのすぐれた成果に接して、早急になり、インサイトに魅せられたり、アイディアの虜になつたりしては困るのである。このような危惧から、アメリカ史におけるキリスト教をその一つのすがたであるディノミネーションナリズム Denominationalism をめぐつて、いまいち度みようとするのが小論の目的である。

歴史的現実と宗教的現実の緊張する係わりあいの中で人と思想を形成した思想家として、今日のアメリカを代表する一人は、H・リチャード・ニーベーである。われわれは、彼の見解を中心に考察をすすめたいと思う。

リチャード・ニーベーは、ジョン・ホールム・ニーベーの弟であり、イエール神学校の教授である。おがくに歴史家には比較的知られていないが、歴史認識との深い関連においてキリスト教倫理をとりあつかい、歐米では第一線で活躍してきた。ここでニーベーの思想と学風を紹介する目的はないが、小論に關係あると思われる点を一二述べておく。リチャード・ニーベーにはトレルチの影響がつよく、それが伴つてウォーバーナムーの提起した問題点にかかわりつい、近代キリスト教の姿を反省したのが『宗派主義の社会的諸根源』<sup>①</sup> H. Richard Niebuhr, *Social Sources of Denominationalism*, 1928. であった。ここでニーベーは、アメリカにおける教派の問題を特にとりあげよう試みている。しかし、本書においてはヨーロッパのプロテスタント諸教派についての叙述がその前半を占めているが、それは本論に対する序説の役を果すものであらう。やがて彼のアメリカ史の解釈が、ターナーやピアードの見解を採用していることが注意される。本書の出版された年代を思ふと、この宗教社会学的視角と新しい歴史学の視角とをあわせものだとはわれわれなどして理解深しいじやうぶつだ。最後に本書が注目出たのはアメリカ史においてもまたアメリカのキリスト教にとりつけられた危機の時代であり、解説欄や序文などに觸れた。本書の題名が、新しく歴史的現実に応答を迫られるキリスト教会の倫理的責任を反省することであった。二百五十余年に及ぶアメリカの教派の存在は、アメリカ・デモクラシーの美点を表わしているかもしれないが、このデモクラシーそのものが危機を予測させていた。そしてこの宗派主義の故に教会は社会に対して倫理的責任をとれないものである。ニーベーが、宗教社会学的方法を展開するのも決して時代の流行の故では勿論ない。教義や信条や教会制度のみからキリスト教の歴史を把握する正統的解釈だけでは、宗教改革以後の複雑なプロテスタンティズムの歴史的展開を見失うというだけではなく、一步すすめて、プロテスタント諸教会の社会に対する倫理的側面が見おとされるという実践的反省がひそんでいたのである。故に、彼にとっては宗派主義の抬頭は、教会の倫理的敗北であり、プロテスタントの歴史は、教会に対する、國家、民族、社会階級等の勝利の歴史でもあったのである。

① Alexis de Tocqueville, *La Démocratie en Amérique*, 1835-40 はその代表的なものである。

② Max Lerner, *America as a Civilization*, 1957, pp. 703-717.

③ William Warren Sweet, *The American Churches, an Interpretation*, 1948 は、カーマーの闇心をもくろんで書かれた。

④ アメリカ教会史への諸闇心は、次の二論文が参考になる。L. J. Trinterud, "Some Notes on Recent Periodical

Literature on Colonial American Church History", *Church History*, vol. XX, 1951, pp. 72-74; "The Task of American

Church History", *Church History*, vol. XXV, March, 1956, pp. 3-15.

(5) Paul Ramsey (ed.), *Faith and Ethics*, 1957, pp. 21-32, pp. 53-64.

(6) ハーマンの歴史に対する関心は強められた歴史的相対主義は彼の神学にも関連があり彼はたんなる便宜的立場が心からしない。

ターナーを援用してくるとは思われない。

(7) H. Richard Niebuhr, *Social Sources of Denominationalism*, (Living age Books, New York) 1957, p. 22.

(8) *Ibid.*, p. 12ff.

(9) *Ibid.*, p. 17ff.

(10) *Ibid.*, p. 25.

(11) *Ibid.*, p. 10.

## 一、ヨーロッパ的背景

### I

アメリカのキリスト教諸教派は、ヨーロッパより渡来し、植民地末期には少くとも十六の教派が存在していた。<sup>①</sup>  
その半数の教派は、おものがの主要な民族的背景をもつてゐる。( ) の数字は、教会数を示す。<sup>②</sup>

組合派 Congregational (バ〇〇)=ヤギョーバ、長老派 Presbyterian (ハ〇〇)=ハロバ・ルーティン・ラジナル、洗  
礼派 Baptist (ゴヤー)=ヤギョーバ、イギリス国教会—監督派— Episcopal (ゴ〇バ)=ヤギョーバ、ルーテル派 Lutheran  
(ゴリル)=ムーア—スヘルツ派 (11) を含む——、ルイジアナ改革派 German Reformed (ゴリル)=ムーア、ホラ  
ンダ改革派 Dutch Reformed (ゴリル)=ホラント、モラヴィア派 Moravian (ゴリ)=ムーア、メノン派 Mennonite  
(六八)=ムーア、フランス改革派 French Reformed=ホラント、クエーカー派 Quaker—ハーフ派 Friend=ハ  
ンク派、メソジスト派 Methodist (ゴリ)=ヤギョーバ、ダムカ派 Dunker=ムーア。<sup>③</sup>

このように、アメリカのプロテスタンントの多様性には、ヨーロッパの民族的国家的背景という重要な要因がある。この点は、たんにアメリカ人の人種的多様性を示すだけではなく、宗教改革後のプロテスタンティズムの一側面をあらわしている。すなわち、ディノミニーシヨナリズムは、近代国家の形成期の民族主義的意識に密接に関係していたのである。

アメリカの植民地時代のキリスト教とそのキリスト教の成果たる政教の分離の達成を語るとき、プロテスタンティズムの右翼と左翼を区別し、左翼の勝利が指摘されている。<sup>(4)</sup> これは国教主義或いは法律によつて樹立される教会を理念とする立場と、これに反対して政教分離を主張する立場による区別である。宗教改革は、ローマ教会よりキリスト教会を解放し、本質において真の福音による姿にたしかえろうとする運動にはかならなかつた。しかし近代国家形成期の社会の体制に適応する過程において、プロテスタンティズムは、抬頭する民族意識を反映し、それぞれ国家に仕える諸教会となつてあらわれなければならなかつた。このようにして、アングリカン教会、ルター派諸教会、改革派諸教会、スコットランドの長老派教会等、国教会の理念にたつプロテスタント右翼の教会が成立した。他方では社会体制の裂目から、かかる立場に反対の諸教派が、すなわちプロテスタント左翼が発生した。植民地におけるアングリカン教会、改革派諸教会、ルター派諸教会及び長老派教会はもちろん右翼であり、組合派教会も渡米前には左翼に属する性格を示してはいたが、植民地では国教主義の代表的役割を果したのである。<sup>(5)</sup> マサチューセッツの組合教会をめぐるその長老派的性格等についての問題は、ここではふれないと、独立派のコングリゲーションナリズムの正統派とみなされるプリマスの教会でさえ、国教主義的性格をあらわしていたことを指摘しておこう。<sup>(6)</sup> これら右翼は、植民地の絶対的多数派として、優勢であつた。これに対しても、左翼はバプティスト、クエーカー及びドイツ系諸教派の小数派であり、大きな制約のもとに存在していた。

このようにアメリカのキリスト教教派の主流であつた諸教会の性格をすこしく検討しておこう。ルター派諸教会、ア

ングリカン教会、長老派教会、改革派諸教会はそれぞれ、ルター、カルヴァン、ジョン・ノックス等の改革者の思想の上にたてられたが、これらの改革者の思想には勿論大きな相違点がいくつか存在していた。さらに、これらの改革者によつてはじめられた運動から教会が樹立され、歴史的發展をとげていくにつれて、お互いの性格に改革者達の相違よりもはるかに広範な相違があらわれていつた。しかし、これらの教会は、なおも、プロテstant左派の諸教派と比較するとき本質的な共通性がみられるのである。この点については、ウエーバーやトレルチによつて示された「教会的な類型」と「教派的類型」<sup>(1)</sup>という把握をとおしてすでに周知のことであるが、いまいちどニーザーによりつつみなおしておこう。

「教会的」な立場にあつては聖礼典、回心、信徒の教育、教職は、概して制度的であり、權威主義的である。それに反しセクトに於いては、より個人的かつ民主的なものであつた。ルター主義とカルヴァン主義、アングリカニズムと長老主義の間にみられる頗著な相違にもかかわらず、国家と表裏一体の関係をたもつ制度化された組織体たらんとし、自由意志による任意な集団でないという共通性が認められる。聖礼典は「回心の象徴」としてよりは「恩寵の手段」であり、信条は、信仰体験から湧きでた「信仰の告白」であるよりは「教理の規準」であつた。このように信仰と礼拝における教義的儀式的形態は、個人の信仰を基礎にするよりは教会の構成員＝國家の構成員＝たる信徒が服すべき「統一」を求めるものであつた。かかる立場こそ、国家の文化を、すべて一つの教会のもとに包含せんとする国教主義の理念にほかならない。<sup>(2)</sup>

この傾向は倫理面において頗著である。社会倫理は国家が関与すべき領分であり、個人倫理は教会において強調されはしたが、行為の倫理的決断そのものは常に個人の責任にのみゆだねられねばならなかつた。これは個人主義の主張に通ずるものではありながら、事実は一方で、政治や経済における社会階級間の対立を教会外におき、教会は信仰と礼拝において国家の統一を保持することに役立つたのである。その結果、教会は社会の不義に対して倫理的に逃避し、下層

の民衆の要請に答えを保留し、間接的には支配者の意図に従うということになった。このような性格がもつともはつきりとあらわれたのはルター主義においてであった。教義上、恩寵の世界を罪の世界からきりはなす二元論は、両者のきびしき内的緊張が失われたときには、自己の倫理的保守性からくる欺瞞を正当化さえするようになるであろう。<sup>(6)</sup> われわれはただこれをルター主義にのみ見るだけではない。後に、罪深き奴隸制のもとで、良心の咎の自覚なしに、よき教会人たりえた人たちを想起させるであろう。

このように、これらの教会の諸特性は、国教主義的な理念に、還元されることが出きよう。もつとも、この国家に対する立場そのものが、ルター主義とカルヴァン主義との主要な相違として指摘されねばならない。前者にあっては、國家は神より直接に神聖なる権威を付与されており、後者では、この権威は人民の意志をとおしてのみ神から付与されるのである。然し、いずれの場合にも国家は聖なる権威を帯びるということにおいて、同一理念を共有し、その相違は、教会が国家に妥協するときに、強調点を異にした国家觀の転換をくりだしたと言ふべきである。<sup>(7)</sup> 一方セクトにおいては、しばしば国家に対する忠誠、誓いは拒否され、戦争や政府勤員に対して奉仕することも拒否された。このように「教会型」のプロテスタンティズムと「教派型」のそれとの対象的な相違は、それぞれの教義と実践において指摘されるのである。

十七世紀にアメリカ植民地に渡來した諸教会は、この「教会型」の伝統にたつ典型的なプロテスタンティズム右翼であった。しかしここで一般化して本質をとらえることの危険性を再び反省しておかなければならぬ。これらの教会はその性格の故に、各国の文化形成の源泉ともなりえだし、またその虜ともなってしまわなければならぬ。これらの教会は、ニーベーの言ふように、「スコットランド教会は、スコットランドの教会であるのみでなく、またノックスの教会でもあった。……(しかし)……ノックスがスコットランドをつくったのにまさるともおどらず、スコットランドはスコットランド教会をつくった」というのである。<sup>(8)</sup> アメリカの政教分離は、バプティストであつたロー・ジャー・ウイ

リトムスの思想の成就是いかならない。しかしながら反面において政教分離の達成は、それに反対する墨墨であった諸教会が、アメリカという環境において経験した挫折をとおしてみだしたのである。われわれは、プロテスタンティズムの両翼の比較からアメリカにおける左翼の勝利を説明せんとする考え方、いわゆる「プロテスタンティズムの歴史的展開」を述べねばならない。

- ① 教派とは小論では Denominations とし、Church と Sect の区別する必論のなじみある教派となる。特は「教派」といふべき Church Type と出発点とする Sect Type を意味する。
- ② Willard L. Sperry, *Religion in America*, 1946, p. 27ff.
- ③ Report of the Society of the Descendants of the Colonial Clergy, 1933 によれば、クニーカー派の教徒数が愈々増加の一途をたどり、ヘリーヤーは小教派の母や有力な教派である。
- ④ Sweet, *op. cit.*, pp. 30-31.
- ⑤ Cf. Perry Miller, *Orthodoxy in Massachusetts*, 1933, p. 73 ff.
- ⑥ Evarts B. Greene, *Religion and the States: The Making and Testing of an American Tradition*, 1941, p. 37.
- ⑦ Cf. M. Weber, *Die Protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus*. 翻訳『プロテスタント精神の本質』(K) — 訳説(1) — 訳説(2) — 訳説(3)。E. Troeltsch, *The Social Teaching of the Christian Churches*, 1931, tr. by O. Wyon from *Die Soziallehren der Christlichen Kirchen und Gruppen*, 1921, vol. II, pp. 986-7, note 510.
- ⑧ Niebuhr, *op. cit.*, p. 124 ff.
- ⑨ いまだ未だ便宜的解決となるべくのむやまく、監禁施設による懲罰がもたらすものである。Ibid., p. 125 ff.
- ⑩ Ibid., p. 129 ff.
- ⑪ Ibid., p. 133.
- ⑫ ニューヨーク州では最初の監禁の実験は、1754年ハドソン川の監獄で、1755年ハドソン川の監獄で実験された。Sidney E. Mead, "From Coercion to Persuasion: another Look at the Rise of Religious Liberty and the Emergence of Denominationalism", *Church History*, vol. XXV, No 4, p. 317 ff.

## II

近代のディノミネーションナリズムの形成には、すでに述べてきたように民族的国家的要因が大きいが、一方には、經濟的、社会的要因が忘れられてはならない。民族的性格で綻断された教会は、社会層によつて横断される傾向にあつた。ディノミネーションナリズムは本質においてその目的と動機と推進力を宗教性に求めるべきであつて、教会史の經濟的な解釈によつてはその本質はおとされるであろうことは常に指摘されている。しかしその契機とその性格を形成する外的諸条件は、經濟的、社会的、政治的諸力にもとめられる。かかる見地から、プロテスタンティズムにも下層の民衆と中產層との顕著な分化が反映した。ディノミネーションナリズムの歴史には、既成宗教にとり残された貧者のための宗教、すなわち、彼らのもし迫つた要求に答へうる教会がその貢をかねるはずである。この貢では、既存の社会文化にもそれに交替せんとする新興の文化にもみはなされていく下層民が、宗教的調練と規律のめどり、むろにかして經濟的に自己を解放しようとする運動を記すべきである。<sup>①</sup> 再洗礼派、クニーカーズ、アンティノミアンズ、メソディスツあるいは、救世軍 Salvation Army 等の運動である。もう一方において記されるのは、とりもなおさず、中產層、すなわち新しい社会の形成力となり文化の荷担者となるブルジョワジーの宗教である。ウェーバー、トレルチ、トーニーの名とともにカルヴァニズムのプロテスタンティズム、あるいはピューリタニズムとして親しまれてきたものである。<sup>②</sup> われわれは、この二つを、ニーベーによつて、「無産者の教会」(churches of the poor) と「中產階級の教会」(churches of the middle class) と名づけておこう。「無産者の教会」は、先づ心理的面と倫理的面に特性が見られる。感情的熱狂性はいれの諸派の共通のしるしであつた。信仰の知的な認識である教義やその結晶としての信条に服するよりは、神と直接結びつく靈感がすべての規準であつた。その結果儀式的要素は排除され、知的な教育をうけ専門家の臭いのする牧職は拒否され、信徒間から指導者を求めた。救いは個人の内面性に認められるだけでなく、社会におけるそれを意味し

た。社会性は倫理面によく示された。文化からみはなされた無産階級特有の知的なナナイヴテは彼らの実際的な要求といまって、ミレニアリズム Millennialism に結びついた。このキリスト再臨のユートピア的希望こそ、社会の現状を変革しようとする、急進性のささえとなつたのである。<sup>(④)</sup> このように、無産者の宗教は、その階層の要求と宗教信仰との結合にはかならなかつた。しかしてこの運動はやがて、構成員の社会的位置の変遷によつて、中産階級の教会と化してしまふか、社会倫理面の世俗化によつて宗教的な本質を失う方向をたどるようになるのである。

ルター派の運動が下層階級の要請に応答しなかつたドイツでは、アナバプティズムにおいて、「無産者の教会」の性格が極端にまではつきりと現われた。また、ルター教会がドグマ的領邦教会化するにともなつて、十七世紀後半に抬頭するピエティズムの諸運動は、カルヴィニズム的な「中産階級の教会」のエトスとともに、「無産者の教会」の性格をも、ルター主義的伝統のうちから培つたものといいうるであろう。

イギリスにおいては、長老派は「中産階級の教会」として、その他の諸派は「無産者の教会」としての性格をもつものとして把握される。その反国教会運動にもかかわらずカルヴィニズムの伝統にたつ長老主義は、カルヴァンが最後まで民衆を信頼しなかつたように、民衆の宗教的倫理的要求に答えられなかつた。<sup>(⑤)</sup> ジェントリ階級の宗教として既成の秩序の維持をはからうとする動勢は、下層階級を苦しめる社会の不正義から目をそらさしむいた。大学出の教義高き指導者の示した知識主義的性格は、信仰体験を感情的にもとめる大衆にアピールしなかつた。ピューリタニズムの独立派であつた組合主義はセクト的形態をとつて起つた。けれども長老主義と社会的性格は類似しており、教会における民主的諸運動にとってかくれ屋とはなりえだが、「無産者の教会」として独自の影響をつくりえなかつたのである。<sup>(⑥)</sup> かくて、「無産者の教会」は再洗礼派、シーカー派 Seekers、ランター派 Ranters、ディガー派 Diggers、レベラー派 Levellers、クリーカー派、第五王国派 Fifth Monarchy Men 等の運動にみられなければならない。<sup>(⑦)</sup>

これらの教派の運動はすでにのべたよだな、無産者の宗教の特性を共有している。すなわち、すべての権威の根源と

して内的経験が重視され、行為の基礎は、キリストの王国がこの地上に到来するという待望にあった。この二つの特性に附隨するものとして、職業的教職の否定と全信徒の司祭性の主張、聖書の靈的解釈、時には、国家の否定と共に産的集団社会形成への実践等がみられる。<sup>(1)</sup>さてここで、このようなセクトの運動がどういかたちで存続したであろうか。世俗的社会運動の中に解消していくといつたいくつかのセクトの中で、クニーカー<sup>(2)</sup>は、その初期の形態を保持しつつ大きく発展した一例である。「教会的」と「教派的」相違においてみたように、恩寵施設としての教会では、その国家に生をうけたものすべてが、とりもなおさず教会の中に生れたものとして、構成員になったのであった。セクトにあっては、その集団に属するまえに、宗教的体験が要求された。それでは、このセクトの信徒の子弟はどのように取扱われるべきであろうか。原理的には血統関係は、何らの資格をもちえないであろう。しかし、少くとも親は子弟が自分と同じ神の恵に浴しうることを願望する。そして、セクトの發生当時には見られなかつた子弟の教育という課題はその教派の義務としてみなされるようにならなつた。ニーライングランドの組合教会において採用された「半途契約」 Halfway-Covenant も、会員資格に契約主義をとる教会の一つの解決法であった。クニーカー派は、信徒が經濟的に成功し社会的地位が変化するにつれて、ミレニアム的希望は影をひそめて、セクト的形式を保存しつゝも、「教会的」教派として内容の変化をとげていくのである。信徒の子弟の教育を教会の重要な機能の一つとしたのは、ルター派教会でありカルヴァン派の諸教会でもあつた。このように、教会化することによつてのみセクトは存続してきだし、教会が保守性をつよめ形式主義に陥るとき、そこに新しいセクトが分派として発生してきたのである。これがディノミネーシヨナリズムの一側面である。

アメリカの教派のヨーロッパ的背景を「無産者の教会」という類型によつて考察するとき、メソディズムについても考える必要がある。しかし、メソディズムの抬頭は十八世紀であつて、十七世紀に統出した教派と同様に取扱うには多くの疑問がおこるので、ニーバーの指摘する要点に一言だけおれておくことにする。メソディズムを「無産者の教会」

いわゆるものは、「中産階級の教会」としてみなす場合もあるが、しかし、中産階級から出た指導者によつてすすめられた、無産階級の要求に答えようとする運動であつた。<sup>(4)</sup> エンゲルズの示した社会悪への関心に比して、その社会倫理面の欠如は、社会運動が当時すでに世俗化したものとして展開されていたということが大きな原因であった。この世俗化に対し、惡が、社会にではなく個人の罪に帰因するという態度になつてあらわれたのである。今一つの特徴である教義上のアルミニアニズムの主張は、カルヴィニズム的既成の教会より個人を解放する傾向を示したものである。この傾向が、あつともよくあらわれるのは、アメリカにおいて「無産者の教会」としておこる信仰復興運動においてであらう。この点は更に後述する。

以上において概観された、「無産者の教会」の性格は、アメリカにおけるディノミネーション・ナリズムの理解に重要な手がかりを提供する。「中産階級の教会」の性格については、その「教会」的な性格と関連して多少のべたにとどまつた。リーベーにおいては、「中産階級の教会」は、ルター派の教会と同じく非セクト的で的であるにもかかわらず、所謂新興アルジヨワジーの宗教となつたカルヴァニズムにその典型が見出されている。<sup>(5)</sup> かかる見解は、すでにわれわれには親しかる感もえ難いので、かかる觀点よりアメリカのディノミネーション・ナリズムの背景として、カルヴィニズムをいじるは余り必要でないであらう。

① Niebuhr, *op. cit.*, p. 28.

② *Ibid.*, p. 29.

③ *Ibid.*, p. 31 ff.

④ *Ibid.*, p. 32.

⑤ *Ibid.*, p. 41; A. C. McGiffert, *Protestant Thought before Kant*, 1917, p. 96.

⑥ Niebuhr, *op. cit.*, p. 43f.

⑦ Gooch, *The History of English Democratic Ideas in the Seventeenth Century*, p. 123ff., 206ff.

- (8) Niebuhr, *op. cit.*, p. 48 ff.
- (9) *Ibid.* p. 20.
- (10) *Ibid.* p. 56 ff.
- (11) *Ibid.* p. 72 ff.
- (12) *Idem.*

## 二、西部の特性

### I

アメリカにおけるディノミネーションナリズムの形成は、ヨーロッパから渡来した諸教派のそれぞれ異った性格を反映した。ヨーロッパの歴史によつて培われた伝統は、アメリカの主要な教派の発展にとって、決定的要因の一つである。植民地の歴史を特徴づけた宗教的対立は、国教主義の教会とセクターとのたたかいであった。アメリカに現存する二百余の教派の多くは、アメリカで生れたのであるが、このアメリカの土壤に根をおろしたディノミネーションナリズムの形成にも、ヨーロッパにおいて民族的、無産階級的、中産階級的な教派の形成にはたらいたと同じ社会的諸力の存在を等閑視すべきではない。このような類型によつて把握しうる性格をアメリカのディノミネーションナリズムは具えてきたのである。しかし、それぞれのタイプの教派は、ヨーロッパにおけるとは異つた条件のもとにあつたのである。その結果、ヨーロッペでは見られない契機によつて、教派の歴史は展開したのである。ニーバーはこの契機を次の三つに見出してゐる。セクショナリズム、移民及びニグロの存在である。<sup>(1)</sup>「アメリカは、ヨーロッペにおける階級的構成の水平線を、地域化された社会の垂直線におきかえた」のであり、「東部と西部、南部と北部という地域化された機構の様相にしたがつて、教会の分派を持続させつくり出した」のである。またアメリカは、多数の教派とともに移住してきたヨーロッペの多くの人種の間に、新たな葛藤をひきおこし、新たに適応する」とを要求したのである。

それでは、セクショナリズムがアメリカのディノミネーションに一大特徴を与えたというのはどういうことでありますか。アメリカの教会におこった分裂と分派の歴史に南北の対立が顕著な影響を及ぼしたであろうことは、いくつかの教派の呼称によつても明かである。これに比して、東部と西部というセクショナリズムと教会との関係はやや明瞭さを欠くようである。しかし、西漸運動によつてたえずつくられていく東部と西部との相違は、アメリカ人の宗教生活によく反映し、その結果、教会は分化して発展するという現象を示した。十八・九世紀の西部の発展によつて、西部的な文化が形成されていった。この西部のフロンティアの社会と文化とは、アメリカ文明の形成に大きな影響を及ぼしたが、それと同時に西部と東部とのたえまない摩擦と対立になつてあらわれた。この西部から独自の政治、経済、社会と、その思想がつくりだされたように、西部特有の宗教的体験が生れかつ表現された。<sup>(2)</sup> すなわち西部的教派が形成された。この西部の教派は、「無産者の教会」の性格を有してはいるが、成立の契機はフロンティアであり、ヨーロッパの教派とは異なるまったくアメリカ固有のものというべきである。これに反して大西洋沿岸の都市を中心にして、ヨーロッパからもたらされた伝統を保持した諸教会が樹立されていた。西部の宗教生活の要求するものは、もはや、東部の教会のもとに統一をたもつことは不可能であつて、この対立によつてアメリカのディノミネーションナリズムは形成されたのである。<sup>(3)</sup>

信仰復興運動に象徴される西部の宗教が、ピューリタンのイメージを伴う東部の宗教と異なることは疑う余地は存しない。しかし、この両者を分裂させる社会的契機としての東部と西部とがいかに理解されねばならない少しひつり説明する必要がある。そのためには、ターナーによつて、「地中海がギリシャに対し、習慣の絆を絶ち、新経験を提供し、新制度と活動を喚起することに果した役割」<sup>(4)</sup> 以上に大きな影響をアメリカ文明の形成に及ぼしたとして、意義づけられたフロンティアの性格が、ここで、とりあげられるのは当然である。ターナーの古典的見解が修正されるべき点を含んでいることは言うまでもないし、また、それを検討するのが目的ではない。しかし、民主主義制度の形成にフロンティ

アが果してどれほどのウェイトをもつてゐるかといった議論はさておいて、膨大な地域研究のうえに展開されたタナーの西部の觀察は、西部の性格とフロンティアの氣風を知るのに、手がかり以上のものを、われわれに、与えてくれる。そこに語られるのは、西部に培われた平等主義と自由とを愛好する氣風であり、権威に反抗する個人主義であった。即ち既存の社会に対して西部の姿は、「複雑な社会も、未開の原野によつて、家族的基礎をおく一種の素朴な組織に変化する。この傾向は反社会的である。これは支配、特に直接的な支配に対する反感を産み出す」ものであつたのである。旧世界の伝統的束縛から解放されて、自由の土地を自力で開拓するときには、フロンティアは「太陽と星のもとで、自らの主人」であつたのである。<sup>(6)</sup> このフロンティア共通の経験によつて、民主主義と民族主義とがつくられるという結論よりも、われわれの関心は、この西部は、東部に對してどのように対立するかという点である。この点については一般的に論ずることはさらに困難かつ危険である。けれども、フロンティアと大西洋沿岸地域との対立は、農業と商業との、債務者と債権者との、社会的、經濟的利害関係を反映するものとしてみるとことが出来よう。それは、市場、社会制度、土地保有等の問題をめぐる地方的利害を中心にしてくりかえし惹起された。この対立において、西部の主張が常に民主主義をおしすすめたというには多くの問題が残されるにしても、ジエファソンからジャクソンへといふ民主主義の発展に西部の抬頭を重要視しないわけにはいかないのである。<sup>(7)</sup> このような対立に加えて、社会的、文化的側面から西部をみておかねばならない。東部によつていだかれた西部に対する保守的なイメージはこの文化的対立をよく示すものである。そこには、經濟的、政治的な認識の以前に、教養ある都會人の、素野で無知な農民に対する感情がよみとられる。西部における、教育の普及の困難さとその低さ、辺境の開拓者間のコミュニケーションの僅少さ等はフロンティアの社会生活とその文化との性格を大きく条件づけた。これに加えて、辺境の定着していくアイルランド人、ドイツ人等をはじめとする移住者に対して、イギリス人系の人々のもつた危惧と警戒とは、フロンティアの社会とそれに対する東部の氣風とを示している。フランクリンですら、やがて英語ではことが通じない時が来るのではないかとさえ心配した

のせ、いのじる所へ物語へて、<sup>(2)</sup>

- (1) Niebuhr, *op. cit.*, p. 135.
- (2) ハーベーが「中西部は文化を移植したが、西部固有の文化を何一つもへだかいた風を指摘した。スカイマーは西部在留輸入ホーリーホームの崇敬が中西部固有の形態をとつてゐる」をロードハーベーは唱へた。アーヴィングは「トマス・J・ワーテンベーカー」、「The Moulding of the Middle West」、*American Historical Review*, vol. LIII, 1948. W. W. Sweet, *Religion in the Development of American Culture: 1765—1840*, 1952, p. 97 note 13.
- (3) Niebuhr, *op. cit.*, p. 136f.
- (4) Frederic Jackson Turner, the *The Frontier in American History*, p. 38.
- (5) *Ibid.*, p. 30.
- (6) Beard, *The Rise of American Civilization*, vol. I, p. 88.
- (7) *Ibid.*, p. 349, 509, 542.
- (8) Turner, *op. cit.*, p. 109f. 脱稿の略歴は「1936年3月15日」。Rush Weller, «The Frontier West as Image of American Society; Conservative Attitudes before the Civil War,» *The Mississippi Valley Historical Review*, vol. XLVI, No. 5, March 1960.

## II

やういふのよだな西部と東部との対立は宗教におよんでのよだに現れたやあゆうか。われわれが、東部と対比して西部の性格をひいたのは、それ自体が目的ではなく、教会が、この対立を超えて、普遍的福音のために共通の使命を果すよだ、の対立に巻込まれて、自ら分裂に拍車をかけていく事実を見るためであつた。<sup>(1)</sup> ハーベーがアメリカの「ハーベー」<sup>(2)</sup> に教会の倫理的挫折をみるのよだの事実の認識によると、そのよだにあつた。ハーベーが「アーヴィング・ランマン Beecher の「西部はこゝにいたいどくなるやあゆう。その広い天地の精神と良心とそして心情とを形成するのに必要だ、大切な施設が発達しない間に、物質的な繁栄ばかりが先に進んでしまつたなゆだ」という叫びは、一方では、ドロセ

Timothy Dwight のようなニューヨークの正統的教職のフロンティアへの嫌惡からくる宗教的ななげきに結びついてある。そしてビーチャーは、ニューヨーク人に向って西部に抬頭しつつある分派について警告を発しているのである。これはいかなる教会の姿を投影しているのであるうか。

都市の商業を中心にする東部では、「中産階級の教会」が樹立されていた。教会は、国教主義からは或る程度自由になつてはいたが、依然として、制度的なものが重視された。信仰内容は理知的に解され、その倫理は、商業階級の安定に奉仕するものであった。冷静な儀式的な信仰表現がとられた。これに反して西部においては、フロンティアの気風を反映した。フロンティアが無産階級ではないにしろ、辺境の開拓者の貧しさとその「無産階級の教会」としての宗教は、次のリヴィング・ソングに如実にあらわれている。

飢え、渴き、ぼろをまとい、裸足にて来れ、穢れ、卑しく、あるがままの姿にて來たれ。<sup>(5)</sup>

「無産者」の教会に常にみられる感情的な信仰の表現はフロンティアの宗教的表現であった。極端にこの性格を帶びたキャンプ・ミーティングは、集団性が抑圧された孤立した辺境の社会では、群衆的暗示の誘惑が容易であつたことを示している。教育の欠如のために、無制約な感情の発散を抑制することが出来なかつたのもその理由であろう。この教育の欠如は、当然反主知主義になつてあらわれ、頭の宗教は心の宗教<sup>(6)</sup>に劣りそれに敵対するものだという信念に裏付けられていく。このようにアメリカの教会史上の大きな特徴である信仰復興運動は、ヨーロッパにおこるセクトの運動とい似た形態をとりつゝも、いたつてアメリカ的なものとしてビーバーはとらえている。<sup>(7)</sup>

西部の民主主義的風潮は、フロンティアの教会の「教派」的「無産者の教会」的組織を見ることが出来る。権威に対する不信は、中央集権的教団を排し、巡回牧師や、平信徒の指導にたよつたことにもあらわれている。フロンティアの

個人主義的な傾向も、個人の内的宗教体験の他は一切たよらないという信仰と同時に、分派が自由意志で参加する任意な団体として発展していくことにみとめられている。<sup>(1)</sup>

フロンティアの倫理意識と教義についての関係はどのようなものか。賭博、乱暴、悪行、飲酒、決闘、安息日の無視等、フロンティアの生活にみられた道徳的墮落は、多くの旅行者の観察によくあらわれている。<sup>(2)</sup> それらに多少の誇張と辺境の生活条件への不理解が存していたにしろ、この瀆神の「暗黒」の中で開拓者たちは自らの罪の意識にとりつかれた。この「暗黒」に「光」をあたえようとする運動こそ、西部的な信仰復興運動であった。<sup>(3)</sup> この個人の不道徳な瀆神を抑制しようとするこの個人的でネガティブな倫理がフロンティアの理倫意識として特調をもつことをニーバーは強調している。というのは、このフロンティアの倫理こそ、「無産者の教会」の示した倫理と対照的相違を呈しているからであつた。後者が都市の下層民が自己を解放しようとする意識のあらわれとしての倫理であるに比して、前者は個人的責任にのみ帰せられる孤立した開拓者の意識を反映する倫理であつた。<sup>(4)</sup>

教義においては、カルヴィニズムからアルミニニアニズムへの変化を指摘することが出来る。<sup>(5)</sup> 予定の教理よりは、人間の行為が救いにあずかりうるという教理の方が、フロンティアにより適応し易いことは肯定出来ることである。<sup>(6)</sup> しかしながら、事実はやや複雑である。ニューアイラングランドの大覺醒運動<sup>(7)</sup> のときには、フロンティアの農民をとらえたのはカルヴィニズムであつて、一方アルミニニアニズムは沿海地方に浸透していた。ケンタッキー・テネシーにおいては、アルミニアン・メソディスト及びアルミニアン化した長老派が既成教会に反抗したのであつた。ニューアイラングランドのアルミニアン・バプティストはサウス・ウエストにもたらされたとき、カルヴィニズムを適用したのである。この事実を、平等主義的氣風には、「選び」の思想のない教義がアピールしたし、他方、世俗の富には神の「選び」は何ら無関である。高貴な紳士も野卑な農民もともに選ばれた器たりうるとするカルヴィニズムもまた西部に適応しえたと説明するニーバーの見解は、ややがちすぎている感なしとしないが、理解に難くない。しかし、各教派の伝道の競争にお

いて、他の教派や既成教会と自派を区別するときにとられる戦略的な要素に帰することも妥当であろう。ともあれ二  
ペーもいうように、カルヴィニズムのもとにおいても、アルミニニアニズムのもとにおいても、同じタイプの宗教がはぐ  
くまれえたというのが事実である。<sup>⑯</sup>

以上で西部を舞台にした宗教の性格を一応知りえたであろう。西部は固有の宗教をつくりだす一つの地域であった。そして、西部こそ東部との対立においてアメリカにおけるディノミネーションナリズムの形成に決定的影響を与えたのである。しかし、西部一般という性格のみでディノミネーションナリズムの実体は明かにはならない。西部は一定の地理的地域ではなく、フロンティアが大西洋岸から西へ移動していくにつれて展開される二つの社会の関係において把握すべきであった。次に、われわれは諸教派の発展と分派の発生を、具体的に検討しなければならない。

- (2) Lyman Beecher, *A Plea for the West*, 1835, p. 30.

(3) Timothy Dwight, *Travels in New England and New York* (1821-1822), II, pp. 473-59.

(4) Turner pp. 36-37.

(5) Merle Curti, *The Growth of American Thought*, 獨口直太郎訳『北米の社会文化史』上巻第4章。

(6) ナイアーハウス著『宗教の開拓』Sweet, *Religion in the Development of American Culture*, p. 149 ff.

(7) ナイアーハウス著『前掲書』四二三頁。

(8) Niebuhr, *op. cit.*, p. 142; cf. Turner, *op. cit.*, p. 345.

(9) Niebuhr, *Ibid.*, p. 143.

(10) ナイアーハウス著『西半球の教会』Sweet, *The American Churches*, p. 45.

(11) Niebuhr, *op. cit.*, p. 143. ジュニアた個人的の機運は承認され、しかし、組織的倫理はロジカルの生産の母と緩和される。

(21) *Ibid.*, p. 143 f.; cf. Cleveland, Catherine, *The Great Revival in the West*, p. 29 f.

(22) Niebuhr, *op. cit.*, p. 144 f.

⑭

「...の間で、南北戦争は福音主義者たちの「保守的・伝統」、反対派が「革新」として見られてゐる。」(前出註脚参照)。

⑮

L. W. Bacon, *History of American Christianity*, p. 223 f.; Newman, *History of Baptists of the United States*, p. 304 f.

⑯

Turner, *op. cit.*, p. 205f.; William B. Hesseltine, "Sectionalism and Regionalism in American History," *the Journal of Southern History*, vol. XXVI, No. I, Feb. 1960, p. 31ff.